浅野 友理子

手のひらの熱(ほとぼ)り

2024年11月8日-2025年2月5日

旅が好きで、土地の文化に興味がありました

—浅野さんは、ずっと植物を描いていますね。

もともと植物の造形、花や木の実を描いて、特に実は象徴的な存在として、生命の循環をテーマにして描いてきました。

—子どもの頃から描いていたんですか。

植物が好き、虫が好きみたいな、そういう感じではなくて、絵を描くことの方が好きでした。

—絵を描くきっかけは漫画でしたか。

漫画は好きでした。小さいときは女の子の絵とか、みんな描きますよね。あんな感じで、外で遊ぶよりは絵を描いているタイプで。よくあるというか……でも、美術の時間とか、つくったりするのが好きな感じで。

—それで興味の対象がだんだん植物になった。

そうですね。大学時代は静物画が結構好きだったですね。人物より、野菜とか、リンゴを描いたり。

—油絵でしたか。

はい、油絵でした。こう描きたい、というのがあるタイプではなかったんですけど。一方で、旅が好きだったので、いろんな土地の民芸品や民族衣装の造形にも興味がありました。生活文化のなかで生まれてくるデザインとか、文様のなかに描かれる植物だったりとか、その意味とか、食文化だったりとか。

—どういうところを旅していたんですか。

学生ツアーで初めて行ったのはスペインでした。そのときはモロッコに行きたかったけど、最初の旅行としてはハードルが高かったので、スペインのアフリカ寄りの、イスラム文化が残っているところに行って。

—アンダルシアですね。

アンダルシアです。白い建物が残っていて、フラメンコとか、文化が混ざっている感じがして。そのあともいろんなところに行っているんですけど、スペインはやっぱり好きだなと思いました。

—グラナダとか。

はい、グラナダは憧れがありました。

—日本にいてイメージしやすい「外国」より、異文化の感じがありますよね。

行ってみないとわからない感じが強くて。旅番組とか、旅行記とかの世界が現実にあって。

—モロッコには行けたんですか。

モロッコには結局まだ行けてないんですけど、アフリカは、大学院生のときにケニアに行きました。マサイの人たちといっしょに植物を植えるという取り組みに先生がかかわっていて、ついていったんです。

—ほかにはどんなところに行ったんですか。

ラオスにも行きました。それも大学の職員のときに、学生たちといっしょに先生について。そこは今でも土器を焼いたり、塩づくりをしたりする村で。昔からの生活文化がまだ残っていて、植物の編み方や虫の調理を手伝ったり、ラオラーオというお酒つくりの工程などみせてもらいました。

—それは面白い体験ですね。

ケニアに行ったときも、それぞれテーマを決めて調査をして。私はマサイの布や色にまつわる聞き取りをしました。ホームステイ先のマサイの女の子と水汲みに行ったり、サバンナを2〜3時間いっしょに歩いたり。時間の感覚が違うのが新鮮でした。

—そうした経験があって、土地と植物のつながりを考える土台ができていったんですね。

最近はあまり描いていないけど、牡蠣とか植物以外も対象にして、食文化を描いたことがあります。

—最初から調査を制作に生かそうとしたんですか。

植物の循環とか大きなテーマを描くときに、ペラッとした感じになってしまうというか、もうちょっとリアルな体験、描きたいと思える生々しい体験がしたくて。大学のときは山形に住んでいたので、食文化をリサーチしたりとか、植物の周辺をもっと見て描いてみたいと思って、自分から興味を持って参加しました。

—大学生のときは、あまり絵を描いていなかったと聞きました。

そうなんです。学部のときは、ダンスのサークルに入っていて。

—ダンスに夢中だった。

ダンスに夢中で、夜も3時とかまでダンスをしていて。サークルにそういう風習があって(笑)

—ヒップホップですよね。意外な感じですけど。

踊ってって言われたら恥ずかしくて踊れないですけど、ダンスとか歌とか好きなんです。いろいろな土地の音楽とか楽器とか、黒人音楽……ローリン・ヒルが高校生のときに好きだったりとか、そういう音楽的な興味もあって。

—それも音楽と文化の結びつきですね。

そうですね。その経験が、絵のリズムとかに生きてきているかもしれない。音楽みたいな感じもあります。

聞いたことを絵にすると世界が広がった

—たしかに音楽的なリズムを感じます。

そういう絵のなかの音楽的なものをまだ言語化はできてないんですけど、リズムはありますね。その土地の音楽が聴こえてくるような。

—蔓が多いのも、画面にリズムを作っている。

ああ、伸びていく感じの。お祭りみたいな。

—最初は静物画として植物をそのまま描いていたから、文化と結びつけるとか、音楽のリズムをそれほど意識していなかったわけですか。

静物画のときは、見るものをそのまま、大学の授業で描くような基本的な描き方をしていて。

—それからダンスに熱中して。

そのなかで民俗音楽とか、日本のいろんな地域の芸能とかを面白いと思いはじめたんですけど、ダンスをしていた頃は、外国のいろんな場所の音楽を聴くのがすごく好きでした。

—アフリカへ行ったのは、その影響もあるんですか。

たまたま、なかなか行けない場所に参加の機会をもらったことがあったんですけど、やっぱり食べものとか音楽とか服とか、伝統的なものをいろいろ見てみたいなとは思いました。

—それで大学院に進まれた。

3年生くらいまでダンスに夢中で、そこからだんだんと絵を描くことが楽しくなってきて。まだ続けたいなと思って、進みました。そこで進ませてもらえたことは恵まれていたなと思います。

—大学に行くときも、美術を目ざそうというのは、すんなり決まったんですか?

そうですね、すんなりだったけど、3年生くらいのときに美大に行こうということになって。それまでは美容師とか、服のデザインとか、身にまとうものとかに興味があって。何かを表現することには憧れがあったんです。高校は美術部だったので、そのうちに美大の選択肢が見えてきて。

—それで芸工(東北芸術工科大学)に行って、大学院で本格的に制作をするようになるんですね。

大学院に行った最初の春に、「ひじおりの灯」という企画に参加する機会があって。肘折温泉で灯籠絵を描いて展示するんですけど、灯籠は長い絵を描くので、何となく物語を描く思考になるというか。そのときは月山竹のタケノコの皮むきを描いたりしました。とにかく自分から積極的に地域の人から聞き出さないといけなくて、学生だったので、今よりもさらに怖いものなしというか、そういうことで参加しているし、やらなきゃいけないので、図々しく取材したものを絵にしました。しかも意外と食文化を描いた人もいなくて、褒めてもらったりして。これはずっとできそうだし、聞いたことを絵にすると一気に世界が広がるという感じがあって、結構面白かったんです。

—それは東日本大震災の前ですか。

震災後ですね、2014年。

—震災のときはどちらにいたんですか。

震災のときは山形にいました。実家は多賀城市でしたが、家族や親戚は無事で、たいへんだから帰って来なくていいよ、と言われて。でも後々聞くと、水汲みが1ヵ月くらい続いたとか。私は帰らずに、山形で悠々と過ごしていたなと思います。

—山形はそれほど影響はなかったですか。

それほどなかったように思っています。同級生でボランティアに行く子がいたり、実家が被災したり、そういう子はいて。

—東北で制作をすると震災の体験が分かちがたいのかなと思ったけど、浅野さんの場合はそれほど関係なく地域の取材に向かっていった感じですね。

2023年の風の沢ミュージアムの個展「つづり思考」で、築200年の古民家の母屋に展示された《藍の緒》と《藍つづり》(上)、《歓びの沼》と《綴舟》(左下)、赤蔵で仏壇に供える削り花とともにならんだ《往来する花》(右下)

最近になってようやく、被災された方とかかわる機会が出てきて。今は住めなくなった土地をいっしょに歩いてもらったりしています。ハマナスの絵は、それをもとに描いたりしていて。

—「ひじおり」の体験は、いまの活動の原型ができていった感じですか。

そうですね。2014年なので、ちょうど10年ですね。

—長く続けられる方法論を見つけ出すのは、なかなか難しいと思うんですが。

運が良かった(笑)。あと結構、こうやってみたらいいんじゃない、と先生に言われたりとか。「ひじおり」とどっちが最初だったか記憶があやふやなんですけど、2014年春に「トチを食べる」という、木の実食文化……木になっているトチの実が、灰汁抜きされて皿の上に出てくるまでを、一枚の絵に描いたんです。昔のエジプトの葡萄酒栽培の壁画を引用してみたんですよ。それもひとつ大事な作品というか。

—いくつかの場面が時系列に沿ってひとつの絵のなかに出てくる描き方をされますよね。一般的に絵は時間を止めるものなので、そのなかに複数の時間を盛り込むことは難しいと思うのですが、割と浅野さんはすんなり描いていますか。

絵のなかのものを動かしたい、動いた状態にしたいという感覚が常にあって。

—その感覚はどうやって身につけたんでしょうね。

あんまり考えていないですね。結構、感覚的。

—複数の時間が描かれているのに、画面に区切りがないのが面白いと思って。描いているのが植物だから、植物が画面を分割していることもあると思うんですが、漫画でいうコマ割りのような明確な区切りがないので、それも有機的な印象になりますよね。

最初の構成とかも、下絵はすごくいい加減で。描かないこともあるし、描いてもモノクロでちょろちょろちょろっと、小さかったりとか。

画面の上で描きながら考える

—いきなり大きく画面に描くわけですか。

考えすぎてもうまくいかなくて、結局全部消しちゃったりして。画面の上で描きながら考える。

—それで破綻することはないんですか。

すると、全部消す。だんだん数をこなしているので、多分成長してきているんですけど。最初の頃は全部消して、なかなか決められなかったり、人に聞いたりしていました。

—全部消すのはもったいないですね。

もう、早く消します。いいマチエールになるな、ぐらいな感じで。重みが出てくるとか。

—日本画の顔料を消すのは難しくないですか。

方解末を全部かけちゃって、もう一回下地をつくるんです。まあ、全消しは滅多にないです。でも2020年にVOCA展に出した《くちあけ》は、1回全部消しました。

—大原美術館に入った作品ですね。

同じ内容を描いているんですけど、構図はまったく違くて。全部詳しく描いちゃったみたいな絵が下にあって。具体的にいっぱい植物があったりとか。

—全部詳しく描くのはだめなんですね。

なんかいまいちな感じで。絵として良くない。今までの大集合みたいな絵になっちゃって。それを消したことによって抽象化されたものが出てきたんです。

—《くちあけ》の亀裂のようなイメージも、描きながら考えたんですか。

そのときの推薦者がビルド・フルーガスの高田彩さんで、絵がうまくいかなくなって相談してしゃべっていくなかで、もう口でいこう、と。ドカンと象徴的な感じにするのかいいのかなと決めたんです。

—それは全消しをしたあとですね。

全消しをしたあと、進まなくなっちゃったんですね。

—時間の制限のある制作は苦しいですよね。

確かに。でも一回消したら一瞬で終わりました。それからは、もう進んで。

—消したことで最終的にうまくいった。

そうですね。思い切り、みたいな感じ。

—話を戻すと、大学院で方法論を身につけて、そのあと大学の職員になったんですよね。

東北芸工大には、いろんな学科があるんですけど、歴史遺産学科という、考古学、歴史学、民俗学で、その頃は東文研（東北文化研究センター）にかかわっている先生や研究員の方が授業をやっているような学科でした。そこで3年間、副手をして。基本的には学生の世話をするので授業を聞くわけではないんですけど、調査に同行したりして。その頃、廃校を利用した共同アトリエを使えるようになったので、卒業してからも大作を描ける状況で、応援してもらっていた感じです。

—その頃、「はじまりの美術館」の展示があった。

「はじまりの美術館」の展示が2016年で、私が働きはじめたのも2016年でした。

—《耕地の緒》という、かぼちゃの作品ですね。

限られた取材期間ではあったんですけど、猪苗代で食べられてきた伝統野菜の小菊かぼちゃと、余蒔きゅうりを題材にして。美術館側から在来野菜を描いてほしいというオファーがあって。

—この作品には胎児が描かれている。

そのときは若い農家の夫婦の畑を取材させてもらって、お子さんがいて、畑に子どもが歩いているのを見ていて。画面の上の方には、軒下にかぼちゃを保存しているところを描いています。

川越市内の小学校の芋掘り体験の授業を取材。今展の新作《土の戯れ》のイメージの源となった。

—胎児のへその緒のイメージですか。

そうですね。茎がかぼちゃにつながっているので、へその緒と胎児に見立てて。

—だんだん絵の方向性が見えてきた時期ですね。

かぼちゃの前が塩竈市杉村惇美術館のVoyageという若手アーティスト支援プログラムで、塩竈市の浦戸諸島で在来野菜の仙台白菜をずっとつくっている方が、今でもまだ、ひとりふたりいて、それを題材にした絵を描かせてもらいました。それを見て、たしか、かぼちゃのことを描いてほしいと言われたのかな。

—仙台白菜の絵を描くオファーがあったんですか。

最初は塩釜とかかわりのあるテーマであれば、わりと自由で。塩釜の浦戸諸島のなかの4つの島を案内していただきました。島には昔、遊郭があったりして、そういうのをいろいろ見つつ、やっぱり自分は食文化かな、と。椿油とか、牡蠣。牡蠣殻を肥料にしたりとか、循環が見えてきたりして、この年は大きな作品をたくさん現地でつくった感じです。

—循環も浅野さんの作品のテーマですね。

すごく大きなテーマですが、それは学部生のときから変わっていない感じ。根っこの部分ではずっと同じことをやっているけど、でも変化はしているかなと。

—そのあとのキャリアも順調ですね。

2018年くらいは、当時あった馬喰町ART+EATというギャラリーに、自分からポートフォリオを持って行って2回ほど展示させてもらいました。そのときは蕪の大きな絵を描いたんですけど、ほかにも食文化にまつわる小さな絵をいろいろ描いて、林のり子さんというパテ屋をやっている方や、芸術人類学者の石倉敏明さんとトークイベントもやって。良い影響をいただきました。ひじおりの灯や山形ビエンナーレに継続して参加したり、あと日経日本画大賞展にも、この頃に初めて出させてもらって。猪苗代の小学校で壁画制作の機会をいただいたり、ちょこちょこそういう絵を観てもらえる機会が増えて行って。グループ展をしたり、個展をやってみたりとか。

手は絵のなかに自然に入ってきてくれる

—とても順調ですね(笑)

運がいい(笑)。あと、つくるスピードとか。生産力。

—運と生産力(笑)。

はい、運と生産力。

—運動神経は良い方ですか。

運動神経はそんなに良くはない……普通です。

—ダンスが好きだから、運動が得意なのかと。

根本的にちょっと体育会的みたいな気質がある。

—がんばっちゃう。

がんばっちゃいますね。

—生産力は大事ですね。

よく、生産力がすごいよねって言ってもらうことがあるので、それは強みだから大事にしたいし、できるだけ挑みたいと思っています。

—もちろん多作の人もいれば、時間をかけてっていう方もいらっしゃるので、それは個性だと思うけど、作家にとって、ものをつくることに積極的なのは大事だと思いますね。それで韓国へ行ったり、最近はニュージーランドにも行かれて。

海外に行くと、その土地の違う文化に触れることが刺激になります。

—民俗学的な要素もありますよね。

そういうことに根本的に興味があります。久々にコロナ明けで海外に行ったとき、開けていく感じが大事だなと思いました。どんどんこもっていっちゃうと……

—その土地の人とコミュニケーションをとって新しいことを知るという意味の開き方ですか。

国によるんですけど、日本にいると日本人のペースというか。もちろん日本は好きなんですけど、海外はキャラクターが変わるみたいな、伸び伸びできる感じ。

—みんなのテンションが高いから。

そうですね。それに引っぱられて。

—それが自分にとってプラスに働く。

もちろん調べに行ったものとの出会いは、いちばん大きいです。食文化とか、共通するもの、異なるもの。描いてみたい出会いがあふれている感じです。

—最近はリサーチ系という言葉もありますね。

わかりやすく言えばリサーチ系かもしれないけど、ひとくくりにはできないものだと思います。取材とかリサーチとか、そうなんだけど、それぞれが何かしら対象としているものがあると思うので、それぞれにしっくりくる言葉があるんだろうなと思います。

—自分ではどういう作家と位置づけていますか。

リサーチして、その土地のものを描くことを繰り返して、ただまとめました、となってしまうのだけはよくないな、と思います。野菜を描いたりしているので、ただ繰り返し描いていると物産館みたいになってしまいそうで。

—リサーチを、そのまま発表しました、という絵ではないですよね。

取材した内容を描いてはいるんですが、引っかかりみたいなのを大事にしているところがあるかもしれないです。その人が大切にしているエピソードとか、受け継がれているものとか……あ、これは描いてみたいなと思うもの。リサーチを続けていくなかで、色々な出会いがあって私自身の目線が変わってきたとか、植物が単純にわかるようになったりする、そういう変化だったり。人に話を聞くにしても、自分のことにしても、あくまで個人的な受け取り方で描いている感じです。

—個人的な物語は入れていないのかと思いました。

あ、そうか。直接描いていないけど、モチベーションにしているだけなのかもしれない、もしかして。

土の戯れ　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　1120×1455㎜

—絵に作者自身の存在はあまり感じないですよね。

たしかに。おばあちゃんが亡くなったときに庭にナツメの木を植えて、それが絵になったこともあったんですけど、すごく個人的なことを描いているけど、絵はもっと広がる。大きなものに見えるようにしている。

—誰の物語にもなりうるということですか。

絵によってタイプが変わるかもしれない。歴史的なことを描いているのもあるし、個人の記憶を描いていることもあるし、結構、幅広い。でも最終的には植物が、抽象性を持たせてくれているのかも。植物は多くの人が親しみやすい存在でもあるので。

—あと、手を描くのが好きですよね。

そうですね。顔はいっさい描かないんですけど。

—後ろ姿を描くことはありますよね。

後ろ姿は描いてますね。顔を描いちゃうと、どうしても顔に目が行っちゃう。顔は強いので。

—顔を描くと固有の人の物語になりますしね。

手はすごく、絵のなかに自然に入ってきてくれる感じ。手仕事を伝えやすいのと、植物にも見えたりとか。溶けこむ感じがします。一体化している感じで。

—手が伸びてくるイメージは特徴的ですよね。

そうですね、神の手みたいな感じで。今は当たり前な感じになっちゃってるんですけど、最初に描いたときは、自分で描いていて、すごいなと思いました。生えるところは、ちょっと気を使って描いています。そうは見えないかもしれないけど(笑)

—植物の隙間から自然に出てくる感じですね。全部植物で埋まっているところから生えてくるのでなく。

絵のなかで浮き過ぎないようにしているかもしれないです。絵と植物が一体になっていくようにも。

—空間から突然手が出てくることもありますね。

空間設定がないのかもしれないです、人より。奥行きがあまりないんです。

—そういうイメージは自然に湧いてくるんですか。現実を再構築しないと、浅野さんの絵の空間は出てこないですよね。

現実ではたぶん、みんなと同じ奥行きを見ていると思うんですけど(笑)。

—手に変換するときに……

自由ですね。だから、すごく自由。自由な感じで描いています。

描いているうちに植物が重要になってきました

—昨年、宮城県栗原市の風の沢ミュージアムで発表された《藍の緒》はとても良い作品でした。ああした大作を見ると、描く前に、ある程度全体の構成が頭のなかにあるのではないかと思うんですが。

そうですね。たしかに《藍の緒》は、受け継がれる大きな流れみたいなものがあって、そこに螺旋のように巻きついているものがあって……ただこの絵も、最初はこの構図じゃなくて、具体的なものが描いてありました。内容や描こうとしているものは同じなんですが。

—消したんですか。

消しました。《くちあけ》といっしょです。大作だと特に、何度も壊したりするなかで絵ができあがっていきます。

—浅野さんの作品は、制作のプロセスで、それぞれの土地や人としっかり関係を結んでいくことが前提になっていますよね。

たしかに……それがないと、すべて同じになっていってしまう感じというか。

—その場所その場所で、土地の人とコミュニケーションをとっていますよね。

どれぐらいコミュニケーションをとれるかは全然違うんです。継続的にかかわったり、そうじゃなかったり、申し訳なさみたいなものも常にあるんですけど、でもそれはしょうがないと思いながら、そのときどきにできることをやって、おさめる、みたいな感じです。

—植物以外のものを描くことはないんですか。

そうですね……版画も植物だし、ベースはやっぱりそこにあって。人物も描いていないし。最初は何でもよかったのかもしれない。でも長く描いているうちに、植物は重要になってきました。

—最初から植物を描こうと決めていたのではない。

そういうわけではないですね。高校までさかのぼれば、自画像を描いたりしました。

—授業や部活では、当然、ひと通りやりますよね。

植物を描いていて、人の……その土地にある、全部別の土地にあることで今できていて。そこでの人のかかわりは結構、重要。なので、もっと人の要素があってもいいと思いつつ……

—難しいですよね。人が入ってくると、もっと具体的な説明になりますよね。

イラストじゃないですけど、自分がやるとそうなっちゃう気がして。

—植物を描くから抽象性が生かされている。

魚とかは描きました。食文化としての魚。

—風の沢の展示では伊豆沼の絵がありましたね。

そうです。あと鳥もちょっと出てきたりとか。あのときは《藍の緒》とか、いろんな絵があって沼の絵もある感じだったので、単独ではやらないだろうなって感じですね。何かちょっと顔、苦手なのかな、もしかして。魚とか……でも描こうとすれば描けると思うんですけど。馬も一回だけ描いたことがあります。小さな作品ですが。

沃土の実り　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　1303×970㎜

—馬刺しですか。

ちゃんと生きている馬で……

—食文化に結びつけているわけじゃなくて。

かつて馬を飼っていた集落に、そこで受け継がれる踊りがあって、そのなかで馬の存在が結構重要な感じでした。馬は好きなので、もっと調べて描きたいかもしれない。最近は動物の存在、鳥の存在とか見えてくる場所とのかかわりがあったりするので。

—それも植物と結びつきますよね。

そうですね。結果的に外せないんです。

—鳥が植物の実を食べて種を運んでいく作品も描かれていましたね。

描きやすいし、自分の描きたいものを混ぜやすい存在になっている感じです。

植物は伸ばしやすい、増やしやすい

—絵画のリズムとして、植物は相性が良いような気がします。最初におっしゃっていた文様とか、そういうデザイン的な要素のなかには植物が入りやすいですよね。

くりかえされるのが植物の特性で。イスラム圏の文様とか。以前、中学校の壁面に絵を描いたんですが、そのときは蔓性の植物を描いたんです。自然に伸びてくるから、建物と相性が良い。

—魚とか、鳥とか、動物だと、どうしても造形的に単体になってしまう限界がありそうですね。

たしかに。植物は伸ばしやすい、増やしやすい、みたいな(笑)

—植物のなかに、いろんな動物がでてくることはあると思いますけど、植物は外せない。

大事にしようと思いますね。

—浅野さんはとても自然に、そうした自分のスタイルを構築されていますね。

ありがとうございます。自然かも。無理のない。

—何でしょうね。とても良いことだと思うんですけども、運が良いという言い方だけでは……

言語化しようとすると難しい。かなり感覚的で、相性が良いみたいな感じです。

—誰もがそうなるわけじゃない。

伸び伸び育っていて(笑)

—自分の目ざす方向性が見えないとか、苦しい経験はなかったですか。

そういう苦しさはなかったですね。人づきあいとかは、人間なのであったと思うんですけど。

—どんどん仕事が大きくなっていくじゃないですか。そのプレッシャーはありますか。

意外と何とか。プレッシャーは……別のところで苦しくならないようにバランスをとっているのかも(笑)。良いバランスで生きている感じです。

—いっぱいいっぱいにならないように。

それもすべて運が良くて。昔から、あまり発言できないタイプで大人しかったんですけど……今も発言できないんですけど、だんだん度胸がついてきているかも。

—そうですか。度胸がついてきましたか。

というか慣れ。繰り返しです。

—大人しい方という印象があるけど、ちゃんと言語化して、思っていることを伝える能力はあって。

ついてきました(笑)

—それは絵のおかげ。

絵のおかげで、機会に恵まれている感じです。

—最初は自信がなかったということですか。

そうですね。今はやっと完成できるようになってきたけど……人に聞くのは客観的な意見がもらえて今も大事だなと思うんです。結構、親でもいいし、知っている身近な人とか、美大の友人とか、完成前に人に見せています。

—人の話を聞きながら制作されるんですか。

その方が安心。一本調子になったりするので。

—意見を聞くのは、美術について知識や関心がある方じゃなくてもいいんですか。

じゃなくてもいいです。最後は描いていると客観的になれなくなってくるので。そういうのはありました。なかなか完成できないとか。でも最近は結構大丈夫。学生のときは、なかなか……

ハマナスの実　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　803×1000㎜
胡桃の木　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　803×1000㎜

—それも場数でしょうか。

場数ですね。繰り返しで習得した感じです。柔軟さはあるかもしれない。頑固さもあるかもしれないけど。結構、お題みたいなものをもらった方が広がるなと思っているタイプです。

—お題を出してもらうことで自分が広がっていく。

あまりに逸れていたら修正するというか、相談しますけど。

—難しいお題で苦しむ経験もなく。

それは、あったような気はする。描きたいものを描くために、イラストの仕事とかをするんですね。最近は人を描いたりとか。

—イラストは商業デザイン的な仕事ですか。

仮設壁に描いたりとか。最近は選ぶようにはしているんですけど。たとえば、近くに仙台朝市というのがあるんですけど、そこで食べられていたものを商店の人たちに取材して、言葉とイラストを描いたりとか。

—それは発注された仕事なんですか。

発注されて。そういうときはたしかに線画で人を描いていますね。鉛筆で色だけつけて。絵に集中したら、という人もいれば、エッセイを出したら、と言ってくれる人もいて。取材するタイプなので。

—それは合うかもしれないですね。いまはフリーで、お仕事が入ったらやるということですか。

そうですね。イラストの仕事です。

—定期的にお仕事に通うことは。

仙台の文化施設でアルバイトをしています。いっしょに働いている人たちも、デザイナーとか、音楽系アーティストとか、5人くらいでまわしている。ちょうどいい感じです。休みもとりやすくて。芸術とか文化にかかわるいろいろな人が訪れる場所なので、刺激にもなります。

—理解のある職場なんですね。

いろんな運が良いというか。タイミングが良かった。

—その良さを感じますね。お人柄にね。

これから、何かたいへんなことが起きるのかなって思いながら生きています(笑)。大丈夫かな。

—アートにかかわりながら生きて行くのはたいへんなので、はねのけなければいけない障害があることが多いけど、浅野さんは割とすんなり来ている感じですね。

かなりポジティブに受けとる方だと思います。

—もともとポジティブなんですか。

もともとポジティブな感じで、ポジティブな人の影響を受けるようにしています。毎回、前の絵を超えなきゃいけないとか、自分も作品を観た人も飽きちゃいけないとか、そこはたいへんです。あ、同じになってきた、とか。ずっと続けているから、しょうがないんですけど。

いまが大事! みたいな感じです

—こうすると自分のスタイルになると決めてしまうと面白くないので、一歩でも自分の外側に出て行こうという姿勢は大事なのかなと思いますね。

よく言っているんですけど、毎回ギャンブルみたいな感じに生きています。

—それで大丈夫なメンタルであれば(笑)

いま! みたいな。いまが大事! みたいな感じです。

—結果はともあれ、守りに入らない姿勢は世界を広げていきますよね。

何かいい、ギャンブルじゃない言い方があればいいんですけど。たぶん好きなんだと思います、ギャンブル。はまっちゃうと思います。なので気をつけようと。

—仕事とか生き方の上で、ある種の挑戦というか、リスクを怖れ過ぎないことは大事かなと思います。リスクを考えて守りに入らないということですよね。今後の目標はあるんですか。

持続的にいまの感じのスタイルで、常に挑戦できるものに出会えたら良いですよね。

—東北周辺の、植物と人とのかかわりをテーマにしてきたことが多かったわけですよね。

住んでいる場所が東北だから自然とそうなっていたんですけど、今後もいろんな場所にいきたいです。

—地域に根ざすことを大事にする作家なのかなと思っていました。

ありふれた葛蔓に誘われて　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　1000×803㎜
胡桃拾い　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　530×530㎜

発酵する唐花草　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　375×455㎜
あふれる菌床　2024年　パネルに和紙、油彩、水干絵具、岩絵具　455×273㎜

そういう部分もあると言えばあります。続けているうちに、自分の住んでいるエリアの意義を大事にした方がいいなと思って……両方大事かも。

—中国にも行ったんですね。

麦積山に。それもツアーみたいな感じなんですけど。西アジアとか文化が混ざり合う場所への憧れがありますね。なので、行きたい国はたくさんあって。

—なぜ文化が混ざり合うところに憧れるんですか。

面白いものが生まれていく感じがあるのと、活気ある感じとか。あとは果実とか、ルーツの場所だったりするので。そういう豊かな場所は行ってみたいです。混ざり合う場所とはまた違うのかもしれないけど。ジョージアとか。

—ジョージア！行ってみたいですね。

行ってみたいです。ただ行ってみたい。

—そうすると、絵と言葉の組み合わせで発表していく形式もあって良いのかもしれないですね。

そうですね。絵画だけもやりつつ……

—エッセイと線画とか。

そういうことができたら良いな、と思っています。小さな本とかを勝手にいっぱい作ればいいんですかね。そうしているうちにチャンスがめぐってきたりとか。

—私はそう思います。生産力です。

生産力ですね。

—仕事の依頼が来たときに、準備できていますっていうのは大事だと思うんですよね。依頼が来る前に、自分から助走して、経験を積んでおく。

たしかに。年に1冊くらいから作るみたいな。

—いつでも飛べますって、準備して。浅野さんは、すぐに依頼が来る人だと思うんですけど。

文章は難しい。本をもっと読まなきゃなって思います。表現方法が全部いっしょになっちゃいそうで。

—いちばんは自分のイメージとアウトプットが一致することだと思うんですよ。それは絵も言葉も同じで、そこに説得力があれば、人の心も動く。

いくらうまくても……みたいな感じですよね。

—そうなんですよ。浅野さんはそれができている作家さんなので、順調に進んでほしいですね。

（2024年10月15日　NANAWATAにて）

まとめ　岡村幸宣

浅野 友理子　あさの ゆりこ

略歴

1990　宮城県生まれ
2015　東北芸術工科大学大学院芸術工学研究科修士課程修了

個展

2024　「対岸の実り」Cyg art gallery、岩手
2023　「種の温床」SNOW Contemporary、東京
2022　「草木往来」長門屋ひなた蔵、山形
　　「脈脈」ツォモリリ文庫、東京
2021　「綯い交ぜ」ビルドスペース、宮城
2020　「植物をしたためる」ビルドスペース、宮城
2019　「土の熟れるころ」ビルドスペース、宮城
2018　「山のくちあけ」馬喰町ART+EAT、東京
2017　「肥沃の森」馬喰町ART+EAT、東京
　　「畑のうぶごえ」ビルドスペース、宮城
2014　「トチを食べる」アートルームEnoma、宮城

主なグループ展等

2024　ACACアーティスト・イン・レジデンスプログラム2024 “SPINNING SCAPES” 青森
　　「みちのおくの芸術祭　山形ビエンナーレ2024」山形
　　「第9回 東山魁夷 日経日本画大賞」上野の森美術館、東京
2022　「みちのおくの芸術祭　山形ビエンナーレ2022」山形
　　「ウォールアートフェスティバルふくしまin猪苗代2022」福島
2021　「第8回 東山魁夷 日経日本画大賞」上野の森美術館、東京
　　「ウォールアートフェスティバルふくしまin猪苗代2021」福島
　　「エマージング・アーティスト展」銀座蔦屋書店、東京
　　「現れの形象」ARTDYNE、東京
2020　「みちのおくの芸術祭　山形ビエンナーレ2020」山形
　　「ウォールアートフェスティバルふくしまin猪苗代2020」福島
2019　「青森EARTH2019　いのち耕す場所　農業がひらくアートの未来」青森県立美術館、青森
　　「たべもの、いきるための」もうひとつの美術館、栃木
2018　「みちのおくの芸術祭　山形ビエンナーレ2018」山形
　　「第7回 東山魁夷記念 日経日本画大賞展」上野の森美術館、東京
2016　「若手アーティスト支援プログラムVoyage」塩竈市杉村惇美術館、宮城
　　「たべるとくらす」はじまりの美術館、福島
2014　「紅花colors」あゆーむ、山形
2013-2018, 2021-2022　「灯篭絵展示会ひじおりの灯」肘折温泉街、山形

受賞

2020　「VOCA展2020　現代美術の展望ー新しい平面の作家たち」大原美術館賞受賞

サツマイモは江戸時代から川越の名産品として知られている。町にはイモ料理やイモ菓子の店がならび、川越市のマスコットキャラクターも、時の鐘とサツマイモを合体させた「ときも」である。

もとは中南米が原産だったサツマイモが日本に入ってきたのは、中国（唐）と交易をしていた琉球経由で、中国語の「甘藷」あるいは「唐芋」とも呼ばれたが、現在もっともよく知られる「サツマイモ」の名の通り、薩摩藩や長崎がその入口だった。江戸時代は飢饉が多く、その対策として徳川幕府がサツマイモの育成を奨励したのは八代将軍吉宗の代で、青木昆陽が普及に尽力した。昆陽は小石川御薬園と養生所、そして上総の不動堂村（千葉県九十九里町）と下総の馬加村（千葉県花見川区幕張町）で試作に成功。次第に近隣の村に広がり、川越藩領では上総の志津井村（千葉県市原市）に種芋を求めた南永井村（所沢市南永井）の吉田弥右衛門が試作に成功した。火山灰土の関東ローム層で覆われた武蔵野台地の新田開発は水不足になりやすく、荒地でも育つサツマイモはすぐに広まった。川越藩領といっても、武蔵野の新田開発の中心は郊外の「三富」で、現在の行政区では三芳町や所沢市にあたる。それでも舟運の盛んな川越から江戸に運ばれたサツマイモは「川越いも」のブランド名で人気を呼んだ。当時人気だった焼き栗より美味という評判と、江戸から川越までの距離をかけて、「栗（九里）より（四里）うまい十三里」という宣伝文句も流行した。

そして現在、川越市の小学校でも芋掘りの体験は4年生の総合学習に組み込まれている。

宮城県や山形県など東北地方を拠点に、植物と人間の営みの歴史を描いてきた浅野友理子さんは、寒冷地の食糧不足の危機をたびたび救ってきた、いわゆる「救荒植物」を描くことも多かったそうだ。川越での個展の依頼をした際、すぐに浅野さんが関心を示したのも、川越とサツマイモの歴史だった。ちょうど折良く、わが家の子どもが4年生で、小学校の担任の先生からNANAWATAに、サツマイモをテーマにした授業に協力をしてほしいとの依頼が届いたところだった。具体的には、芋掘り体験にあわせて、先生が子どもたちからあずかったお菓子づくりについての質問をまとめたインタビューの動画を授業で流し、子どもたちから出てきたアイディアを商品化して店舗で販売するという内容だった。芋掘り体験の授業を浅野さんが取材し、新作の絵画を描きたいという依頼も、すんなり受け入れていただけた。

秋晴れの朝、浅野さんは新幹線に乗って仙台を発ち、川越まで駆けつけた。先生に引率された子どもたちが畑に到着し、まずは地元の農家のみなさんにご挨拶。クラスごとに畑にならんだ子どもたちは、声をあげながら蔓をたよりに土を掘る。黙々とひとつの場所を掘り続ける子。次々に場所を変えながら、新たな土を掘り起こす子。わずかな時間のなかでも、子どもたちの性格は見えてくる。浅野さんはカメラを首から下げて、土にまみれた小さな手の動きを追っていた。手のひらに残る熱りは、豊かな表情をつくり出す。畑の端には、たちまち不揃いな大きさの芋が山と積まれた。

今展のメインイメージとなる絵画《土の戯れ》の画像が浅野さんから届いたのは、それからまもなくのことだった。色鮮やかな赤い芋、深い緑の葉、軽やかなリズムをきざむ蔓や葉脈や毛細根、芋から生え出す芽のうごめき、やわらかそうな子どもの手。ひと目見て賑やかな時間がよみがえってくるようで、たちまち心が浮きたった。

浅野さんの絵画を観る機会は、VOCA展や日経日本画大賞に出品された代表作のひとつ《くちあけ》をはじめ、これまで何度かあったけれど、もっとも印象に残っているのは、2023年、宮城県栗原市の風の沢ミュージアムで開催された個展「つづり思考」だ。土地に生きる人と動植物たちとの営みを、長い歴史の時間軸や此岸と彼岸の境界を仄めかしながら描いた絵画の大作が、栗駒山の麓の肥沃な水と土に恵まれた里山に建つ、築200年という立派な古民家を舞台に公開されていた。

茅葺き屋根の母屋の板間。囲炉裏のまわりにぐるりとならんだ幅7mを超える8枚組の絵画は、薄暗がりに深い藍の色が溶けこみ、帯状に塗られた黄金色の輝きがことさら鮮烈だった。その周囲には浅野さんがみずから染めた布が梁をわたり、優美な曲線を描いて垂れ、土地に流れてきた時層を示すようにも感じられた。

浅野さんは、2021年春、自身の母方の祖父母が生まれ育った場所であり、幼い頃から通っていた馴染みの深い栗原市の文字地区で、「正藍染」を受け継ぐ人たちに作業工程を学んだそうだ。「正藍染」とは、染液をつくる際に木炭のみを使用して自然の温度で発酵させるという、いにしえからの技術である。近代になって外国から化学染料が大量に輸入され、染色技術の進歩や織機の発明によって衣料が量産されるようになったが、文字地区には現在も「正藍染」が伝え残され、宮城県指定無形文化財に指定されている。浅野さんは、その手わざを受け継ぐ体験を、「染め上げる瞬間の色の変化、木樽から香る発酵の匂い、そばの二迫川に身を任せるように漂う青の布。今は地域で一軒になった藍染農家で貴重なその工程に触れながら、藍という植物の持つ力や、文字の風土、そして語り継がれる個人の物語に惹きこまれていった」と身体感覚にもとづく言葉で記していた。

続く座敷には、大胆に渡り鳥や蓮根の絵で彩られた木舟が一艘配置され、水辺に生きる人びとの暮らしを支えてきた鯉やドジョウ、ウナギ、沼エビたちの曼荼羅のような5.6mの絵画とともに、伊豆沼の生態系を示していた。新緑のまぶしい屋外に出れば、気ままに歩く猫に導かれるように、離れの馬屋で山菜や雉など野山の食文化と小豆鍋を描いた絵画に出会う。裏手の赤蔵にまわれば、薄暗がりの狭い空間に、亡き先祖へのお供えものとして作られるという白い削り花が浮き上がり、異界への扉を半開きにしていた。

浅野さんの絵画は、人間が長い歳月のあいだに土地に根ざして、野の草花や小さき者たちの存在とともに築き上げてきた豊かな営みを、人間の手や花と種子、あるいは血脈などのイメージが有機的に複雑に交わるように提示する。そのために草花を観察し、特性を理解し、みずから手を動かして、暮らしに役立たせるための方法を試してみるのだ。そして受け継がれてきた記憶をいったん自身のからだにとりいれ、絵筆を通して新たなかたちにあらわす。それはつまり、他者へ手わたし分有する、ひそやかな対話的行為である。

若葉が芽吹き、花が咲き、実を落とす。繰り返される自然の循環とともに育まれた智慧は、人間にとってかけがえのない宝となる。それは、それぞれの土地にそれぞれの文化をもたらす源泉であり、浅野さんの仕事は、そうした歴史のフィールド・ノートとも言うべき、絵画の実践なのだと思う。

（岡村幸宣）

NANAWATA NOTE 20
2024年11月20日 発行

NANAWATA BOOKS
350-0056 埼玉県川越市松江町 2-4-4
電話 049-237-7707　FAX 049-237-7708
メール info@nanawata.com
ウェブサイト https://nanawata.com